

## 邪馬台国を統計学で突き止めた

安本美典(数理歴史学者)

百年以上続く邪馬台国論争。

九州説と畿内説をビッグデータで分析すると意外な結果が……

邪馬台国は、弥生時代後期にあたる紀元三世紀頃、日本にあった倭国の都です。倭国は、約三十か国の連合国家でした。邪馬台国とその女王卑弥呼については、西暦285年頃にまとめられた中国の歴史書『三国志』の中にある「魏書」の「東夷伝倭人条」(通称「魏志倭人伝」)に記されています。

邪馬台国がどこにあったのか、そして卑弥呼が誰なのかは、日本古代史の最大の謎のひとつとなり、江戸時代から邪馬台国論争が始まりました。とくに1910(明治43)年、東京帝国大学の白鳥庫吉教授が「邪馬台国北九州説」を提唱したのに対して、京都帝国大学の内藤湖南教授が「邪馬台国畿内説」を主張し、この二説を中心に、百年以上も大論争を繰り広げています。

ところが、今世紀に入ってから、奈良県桜井市にある纏向遺跡とその内部南側の箸墓古墳が、それぞれ邪馬台国と卑弥呼の墓の候補だと脚光を浴びるようになりました。とくに、2009年5月31日に開かれた日本考古学協会の研究発表会で、国立歴史民俗博物館(歴博)の研究グループが、これまで四世紀の築造とされてきた箸墓古墳の築造年代を、発掘した土器に付着していた放射性炭素 14 の測定により、これまでより百年以上早い「240～260年」と発表してから、畿内説にあらたな火が着きました。

この発表の二日前に朝日新聞は、「やっぱり卑弥呼の墓？ 死亡と築造の時期一致 奈良・箸墓古墳、放射性炭素年代測定」と、歴博研究グループのリークにより。”スcoop”しています。

その頃から、テレビやマスコミは、纏向遺跡を「邪馬台国の有力候補」と報じるようになり、「最有力候補」と決めつける新聞も現れました。

ところが、日本考古学会の会場でも、歴博研究グループの年代測定法について「非科学的で話にならない」という批判が相次ぎました。さらに、翌2010年3月、日本情報考古学会が「炭素 14 年代法と箸墓古墳の諸問題」というテーマでシンポジウムを大阪大学で開き、歴博研究グループの発表の内容をほとんど全面的に否定しています。

実は、纏向遺跡はおろか、奈良県内の遺跡からは、弥生時代の年代を明確に示す遺物は、何ひとつとして出土してはいません。「纏向遺跡＝邪馬台国説」の根拠はただひとつ、問題の多い歴博研究グループの年代測定結果だけなのです。

以下続く……